

大野川流域における河川のレジャー利用区間の空間構造について

日本文理大学 学生会員 ○園田 寛規
正会員 中西 章敦

1.はじめに

かつて人と河川は深く人と繋がり、生活に関する利用をはじめ、飲料水、農業用水や工業用水として広く利用されてきた。流水の利用だけでなく、河川空間は魚類や水制生物、それらを捕捉する鳥類等多くの生物の生息箇所として、また流域住民には散策や休息場所、川遊びなどのレジャーとしても利活用されてきた。しかし近年、流水の利用は継続して多く見られるものの、河川のレジャー利用は著しく低下している¹⁾。これまで河川の水質の汚濁や河川での事故を回避するため学校での教育として川遊びを避けてきたが、近年では総合学習の時間や河川自然観察教室のように川遊びを子ども達に教える活動も多くなっているが、自発的な川遊びには繋がっていない。

人々に利活用される川として里川²⁾の考え方も広まってきているが、農業用水としての利活用を中心にした集落を対象とした研究³⁾にとどまり、様々な利活用、特にレジャーに着目した研究は少ない。

今回、大分県を流下する一級河川大野川の流域におけるレジャーで利活用されている河川区間について、その特性を明らかにすることで、河川のレジャー利用の促進に寄与することを目的とする。

2.研究方法

研究対象は、大分県内でも多く多様な河川の利用のある一級河川大野川水系の本川および支川のうちレジャー利用のある区間とした(図-1)。本研究における「レジャーの利用」とは、農業用水や工業用水のような流水の取水利用ではなく、また生活での利用を除いた、水遊び、カヌー等スポーツ、魚釣り等における河川利用と定義した。利用区間については大野川流域で広く活動を行っている大野川流域ネットワークにヒアリングを行い、区間を設定した。

それぞれの利用区間に対し、河川の空間特性を把握するため航空写真での利用区間の確認と現地での測量を行い、あわせて利用区間の水質調査を行った。



図-1 一級河川大野川水系

3.結果と考察

各調査地点の河川および背後地の状況写真と代表断面を測量した諸数値(川幅 W , 護岸高 H , 護岸勾配 ϕ , COD)について以下に示す。以降の調査地点の番号は図-1の番号と対応している。

①, ⑤, ⑥については背後地がキャンプ場となっており、護岸整備を合わせて行っているため緩勾配なうえ車輛の乗り入れも可能な販路等アクセス性に優れていた。

① 陽目の里キャンプパーク周辺：大谷川



図-2 左：大谷川，右：背後地施設

$W=24m$, $H=5.5m$, $\phi=1:1.2$, $COD=0.5$

② 中島公園河川プール周辺：緒方川



図-3 左：緒方川，右：背後地施設
 $W=33m$, $H=1.1m$, $\phi=1:3.0$, $COD=2.0$

⑥ 犬飼リバーパーク周辺：大野川



図-7 左：大野川，右：アクセス施設
 $W=32m$, $H=5.0m$, $\phi=1:4.0$, $COD=2.0$

③ 轟橋・出会い橋周辺：奥岳川



図-4 左：奥岳川利用状況，右：周辺地施設
 $W=39m$, $H=12.1m$, $\phi=1:0.0$, $COD=1.0$

⑦ 河原内川河川プール周辺：河原内川



図-8 左：河原内川，右：背後地施設
 $W=33m$, $H=3.0m$, $\phi=1:1.5$, $COD=2.0$

④ 白山川河川プール周辺：中津無礼川



図-5 左：中津無礼川，右：アクセス施設
 $W=25m$, $H=6.0m$, $\phi=1:0.5$, $COD=0.5$

⑤ 井崎河川公園キャンプ場周辺：奥岳川



図-6 左：奥岳川，右：アクセス施設
 $W=34m$, $H=4.5m$, $\phi=1:3.0$, $COD=2.0$

②，④，⑤，⑦については河道内に河川プールを有し，安全に川遊びが出来，プール周辺の河道内へ階段等アクセスが整備されていた．③についてはジオパーク指定の柱状節理や日本最長の石橋を有し，アクセスや案内看板等も整備されていた．

4. 結論と今後の課題

流域内のレジャー利用が多くされている箇所については既存施設とうまく調和されており，アクセス性や河川だけでなく遊ぶことが可能であった．

今後の課題としては，実際にレジャー利用している利用者へのアンケートやヒアリングが考えられる．

参考文献

- 1) 河川審議会川に学ぶ小委員会：「川に学ぶ」社会をめざして報告，国土交通省，1998.6
- 2) 鳥越皓之，嘉田由紀子，陣内秀信，沖大幹編：里川の可能性，新曜社，2006.11
- 3) 中西章敦，佐藤誠治，小林祐司：大野川流域における里川の空間構造と心象風景との関係，土木学会論文集 D1, Vol.74, No.1, pp.15-28, 2018